
ラブコメは他所でやって！

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブコメは他所でやって！

【Zコード】

Z9943D

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

シャツフル企画（キャラクター設定：和藤渚さま　ストーリー：早村友裕）　誓つてもいい。あたしはいたつて普通だつた。それなのに……なんでこんなことになつてしまつたんだろう！　ラブコメと見せかけた青春スポーツもの、でもないような。

ラブノーメは他所でやつて！

きつとポテンシャルはあつたんだろう。認めたくないけれど
だつてなにしろあたしの周りにはそれっぽいヒトたちがたくさんい
たんだから。

まず、女の子に間違われちやうのような、ちつちつと愛らしげ男
の子。

その男の子の幼馴染で、男に間違われるようなカツコい女の子。
最後に、人の話なんててんてこ舞いうとしないモデルみたいな容姿
のナルシストな先輩。

そんな3人がいる時点でもうすでにどこかの漫画だ！ って感じ？
今すぐでも物語なじがスタートしても違和感ないシチュエーション。

けど、誓つていい。

あたしはいたつて普通だつた。

中学の時少しばかりみんなより勉強ができたからそれなりの進学
校に入学して、少しばかり絵が好きだったから美術部に所属して、
少しばかり世間に疎かつたから特別目立つわけでもなく、だからと
いっていじめのよう無視されるというわけではなく平凡な毎日を過
ごしていた。

それなのに。

どうしてこんなことになつてしまつたんだろう？

それはずつと分厚い雲が覆つていた空が少しづつ晴れやかさを増
し、テストさえ終われば世間一般的な『青春』の代名詞、17歳の
夏がやつてくるつていう、素晴らしい季節のことだった。

その嵐の警鐘はあたしの気持ちになどお構いなしに唐突に、そして高らかに鳴り響いた。

テスト一日前、放課後の美術室。

こんなところにやつてくるのはあたしからいのものだ。それなりの進学校であるこの荒神高校の生徒であるならば、図書館、または帰つて家でまじめに勉強するのが普通だらう。

そうでなくとも、美術部なんて幽霊部員ばかり。まじめだった3年生の先輩たちが本格的な受験勉強を始めてしまつてからはほとんど1人で活動していた。

どこか埃っぽい、しかし絵の具の匂いに満ちた空気が迎えてくれる。いくつものキャンバスが描きかけのまま放置されている。スケッチ用の壺や、人間の上半身を象つた石膏像が後ろの棚の上にずらりと並んでいた。

いくつもの石膏像の視線を受けながら棚の前を横切り、日が差し込む窓辺にカバンを置く。そして、いつも持ち歩いているスケッチブックを鞄から取り出した。

ぱらぱらとめぐると、最初の方のページはほとんどが同じ人物の絵で埋められている。正面、横顔、全身の画も、後ろ姿まで様々な角度から描かれている。

「本当に……綺麗なひと」

このスケッチブックに描かれた先輩は、性格には難ありでもモデルとしては一級だった。だから、あたしはその造形的な美しさに魅ひかれて、何度も何度もスケッチした。

一つ一つ、丹念に手をかけて創られた美術品のよう、左右整った目鼻立ち、180cm以上はあるだろうすらりとした長身、すべての女の子を虜にしてしまうであろう柔らかな微笑み。

それも、モデルになつても見られていることを意識せず、照れずに自然な表情でいられるという天性のナルシストだった。

「はあ……」

あの性格さえなければね。

ぱたん、とスケッチブックを閉じた。

そして、今日もしばらくキャンバスに向かって、入学してから何度も何度も繰り返してきた壺のスケッチでもしてから帰るつもりだった。

ところがそうはいかなかつた。

カラカラ、と軽い音を立てて美術室の戸が開く。

普段なら誰が来ることもない美術室にやつてきたのはいつたい誰？ そう思つて振り向くと、そこに立つていたのは 天使のように愛らしい少年だった。

大きな目をきょとんとさせてこちらを見ているのは、クラスメイトの今井俊太。

女子として平均よりずいぶん低身長のわたしよりも5cmは低いだろう。小さな丸顔と愛らしい童顔のせいで、まるでテレビに出ている子役のようだ。パステルカラーのフード付きパーカーの袖から小さな手が半分くらい覗いている。色白の肌の中に頬がかすかに色づいていた。丸い目と小さめの鼻と口が完璧なバランスで顔の中に配置されている。色素が薄く焦げ茶色に近いサラサラの髪もよく似合っている。

「今井くん、珍しいね」

とても同じ年とは思えないほど幼く見える彼は、その容姿からクラスのマスクコット、またはペット的存在としてみんなから可愛がられている。

また、この可愛らしい少年は、美術部と吹奏楽部を兼部している。そのためこちらにはめったに顔を出さないのだが、何か月も見ていない幽霊部員たちよりはよっぽど部員らしい部員だった。

「こんなにちは」

おずおず、と美術室に入ってきた彼ににこりと笑いかけた。

「吹奏楽部の方は？」

「今日はテスト前だからお休みだよ」

吹奏楽部は多忙だ。この期末テストが終われば高校野球の応援と夏のコンクールが待っているはずだった。

「久しぶりに絵が描きたくて、きちゃつた」

はにかむように笑った顔も完璧だ。男とか女とか、そんなものもすべて超越している。

この子は、平凡なあたしにとつて唯一の癒しだった。この愛らしい子と少し話して、少し近くにいるくらいは許されるよね？

「隣でぼくも描いていいかな？」

「いいよ。今日はきっと誰も来ないはずだしね」

「ありがとう…」

そう言つてにこりと笑つた今井くんを見て、決めた 今日のモチーフは彼にしよう。うん、きっとそれがいい。

そして、この間描いたティベアのラフスケッチの横に飾るとしよう。

その時、再び美術室の扉が開いた。

今日はお客様の多い日だな。

「やあ、久しぶり！」

振り返る前に声が飛んできた。

やあ、なんてわざとらしいセリフ、本気で口に出す人間は一人しか知らない。できればこのテスト前には聞きたくない声だった。

「……お久しぶりですね、川島先輩」

「おや、つれないな。きっと君が一人で暇をしていると思つて構いに来たというのに」

「どうせ先輩が受験勉強に飽きたんでしょう？ 美術部員でもないのに息抜きにこの部室を使わいでください。受験、落ちても知りませんよ？」

ため息とともに振り返ると、スケッチブックの大半を占めている姿がそこにあつた。

「相変わらずのシンドラ氣候だねえ」

意味不明のセリフを吐いてひよい、と肩をすくめたのは川島耕太先輩 この荒神高校では最も有名な3年生。

有名な理由はやはり、この姿にある。ついこの間までバスケ部

でフォワードを務めていたため、すらりと引き締まつた長身の持ち主で、またモデルを自ら申し出るほどに整つた顔立ちをしている。それだけでもじにこでも田立つところに、頭に超の付くほどナルリスト。

身長151cmのあたしにとっては、かなり見上げなくてはいけない相手だ。

しかしながら、見上げた顔はやつぱり男前だった。視線に気づいたのか先輩の口角が少し上がる。

「見とれているのかな、風見響子さん？」
かざみきょうし

「そうです」

ただし、あたしがこの先輩の顔をまじまじと見るとさせ、美術品を鑑賞するときと一緒にだ。

美しいものを見る。

ただ、それだけ。

「君はいつもそうだな。俺を真っすぐに見ている。他の女の子たちは真っ赤になつてすぐ目を逸らすところに」

「赤くなる理由も田をそらす理由もありません」

「だが、いくらでも眺めてくれて構わないよー。俺も鏡の中の自分の顔を見飽きることはないからな」

「……帰れ。もしくはヒトの話を聞け」

「しかしと本音を呟いたが、川島先輩には届かなかつたようだ。じろじろとあたしを見下ろして、ぽんと頭に手をおき、しみじみと息を吐いた。

「しかし、相変わらず君は小さいな。そんな身長できちんと世界が

見えているのか？」

「つっ！」

お前がでかずぎるんだ。そんなセリフは飲み込んだ。
軽く頬がひきつったがこんなことで心を乱していっては川島先輩の
相手はつとまらない。

平常心、平常心。

「世間では牛乳を飲めばいいと言つひひじいから試してみてはどうだ
？」

「もう伸びません。成長期は過ぎました。それに牛乳飲んで背が伸
びるなら、今頃は世界中の仔牛が八頭身ですよ？」

「ああ、だがそれでは伸びるまでに時間がかかるな。それまでこん
な姿でいるというのは非常に不憫でならない」

「人を勝手に不幸にしないでください」

「それじゃあてつとり早く……引っ張つてみてはどうだ？」

「ご心配ありがとうござります。でも、本当に不便してないので大
丈夫です。そんな暇があるなら世界が100人の村だつたらどうな
るかってことについてでも考えてください」

そう言つと、川島先輩は唇を子供のように尖らせた。

「君は我儘わがままだな」

「……つー！」

むかつとしたが、何とか抑える。

平常心、平常心。

しかもこれら台詞がいやみでも挑発でも何でもなく、心の底か
ら出していることも分かっている。

この先輩は本気であたしの身長について心配してくれているのだ。

そのうちあたしの首をつかんで引っ張りだす、という事態にもなりかねない。

まあ何にせよ、この先輩の相手は面倒だ。おとなしくモデルになつていってくれれば全く問題ないが、テスト一日前の今日、あたしも早めに帰りたかった。

はあ、と大きなため息をつく。

これはナルシストというより自信家だろうか。

もちろん言葉通り、川島先輩の成績は学年でトップクラスだ。それは知っている。

顔がよくてスポーツができて勉強ができたらどうしてもこんな人間が出来上がるてしまうのだろうか？ それなら、神様はもう少しでいいから能力の配分を考えた方がいい。

川島先輩はなぜか上機嫌で美術室を見渡し、突然の訪問者に呆然とたたずんでいた今井俊太に目を止めた。

「誰かいたのか。せっかく一人で寂しくここにいる君の相手をして俺の評価を上げようという計画が台無じじゃないか」

「先輩、考えることが全部口から洩れてますよ？ それにそんなことであたしの中の先輩の評価が上がる」

「そこの君！ いつたい誰だつ！」

……と思つたら大間違いつ、最後まで人の話を聞けーつ！

いやいや、平常心平常心。

ひとつ、深呼吸。

「あたしのクラスメイトです。美術部員だけど、吹奏楽部と兼部し

てるから川島先輩は初めて会うかもしれませんね」

「あ、やっぱりあなたが川島先輩だつたんですね」

先輩の大声とオーバーアクションにびくびくして窓際に寄つてい
た今井くんは、少しほつとした顔をしてこちらに近づいてきた。

うわ、身長差が目測で約40cm。あたし以上の身長差だ。まつ
と先輩は今井くんの旋毛つむじしか見えてないに違いない。

しまつた、今井くんの首を掴んで引っ張りだす前に引き離さねば

……！

ところが。

なぜかここで、予想外の事態が起きた。

「はじめまして、川島先輩！」

首いっぱいに見上げた今井くんがにこり、と微笑んだ瞬間。
先輩の動きが停止した。

いつもなら笑みを湛えている口元が、茫然と開かれている。綺麗
な形をした眼が大きく見開かれていく。何より、頬がみるみるうちに
真っ赤に染まつていった。

「はっ、ははは、はじめっ……まして！」

川島先輩が異常なまでに緊張した口調でそう絞り出した。この
人がこんな様相を呈するのは、後にも先にもこれつぎりだった。
その様子を見て今井くんがきょとん、と首を傾げる。

うつ、これは……！

あたしの中で警鐘が鳴り響く。

人が恋に落ちる瞬間を見てしまつた。なんて、どこかの少女漫画
だ、それは！

確かに今井くんは童顔で、笑つた顔なんて本当に女の子のように
愛らしいと思う。私服登校のこの高校において、男だと思われるよ
り女に間違われた回数の方が多いんじゃないだろうか。

彼が少々、いやかなりほんやりとした性格で、間違いを否定しな

いからその勘違いは加速度的に広まっているのだが……！

「先輩、落ち着いてください！」この子は……

「おおおお、俺を知っていたのか？」

「はい。だつてヒビキちゃんのスケッチブックにいつぱい描いてあつたから。ずっときれいな人だなって……会ってみたいなって思つてました」

「う、今井くんの笑顔がまぶしつ！ キラキラと後光までさして見えるよー。そしてそれは今の先輩にとつて目の毒だつ！」

「ふ、ふふふ、そうか。そだろうー。」

先輩は大きな手で今井くんの両肩をつかんだ。

ちょっと先輩、なにする気？！

ところが今井くんはさらに不思議そうに首をかしげて先輩を見上げている。

ちょっととは抵抗しない！

「えと、川島先輩？」

見つめあつてないでつ！ いや、この図、絵的にほすくいいんだけど。

刹那、さらに美術室の扉が乱暴に開かれた。

ああもう、いったい今日はどうしたというんだろう？ こんなことならさつと帰つておとなしくテスト勉強でもすればよかつた！ もう勘弁して、と振り向いたそこにいたのはこれまた整つた顔立ちをした少年だった。

「「んなどこにいたのか、シウン」

今井くんに向かつて不機嫌そうに眉間にしわを寄せたのは、中性的に整つた顔立ちの少年……いや、実は少女だ。

クラスメイトの緋村琴音。和風美人な名前とは裏腹に、髪はベリーショート、常に男ものの服を身につけているせいで、今井くんとは対照的に男に間違われることが多い。空手部唯一の女子部員にして170cmオーバーのすらりとした長身、ボーアイシッシュな顔立ちで学校中の女子生徒を虜にしている。

今井くんとは幼馴染で、はたから見れば付き合つているようにも見える。見た目性別が逆転しているとはいえ、非常に見田麗しい一人だ。美少女と美少年、並んでいても絵になる。

ところが現実は、しつかりした緋村さんがオトボケ今井くんの保護者をつとめている、というのが正解らしい（本人談）。

「あ、ひいちゃん。待つてて、少し絵を描いてから帰るから」

川島先輩に肩を掴まれたままの今井くんがボーアイシッシュな少女ににこり、と笑いかける。

その瞬間、少女の眉間の皺が倍増した。

うつ、なんか……この部屋だけ気温が一瞬で氷点下？！ これぞまさにゾンドラ気候？！

「おいシウン、誰だ、それ」

「えーとね、川島先輩」

「んで？ 聞くが、そいつが何でお前に触つているんだ？」

幼馴染の少女の問いに今井くんはさあ、と可愛らしく首をかしげる。

突然の乱入者に驚いていた川島先輩も、はつとして今井くんの肩

から手を離した。

首を傾げる今井くん。睨む緋村さん。そして慌てる川島先輩。はたから見れば学校一のイケメンの先輩（？！）が可愛らしい少女に一目ぼれ。そこへ少女の幼馴染の少年が現れてあわや乱闘、みたいな？

いや、先輩は明らかに目の前の愛らしい子が「女」で、乱入者が「男」だと思つているだろう。だからこそ、厄介だ。

「いつたい誰だ？ 一緒に帰るとは、まさか恋人！ 君たちは恋人同士のかつ？！」

3人の姿を考えると、まるで恋愛小説のワンシーンのような光景。絵的にはいいんだ、絵的には もし今井くんが女で緋村さんが男ならね！

愛らしい今井くんと対照的に、非常に男前な緋村さんは、なぜか先輩ではなくあたしに向かつて聞いた。

「つるさいな、こいつこそ誰だよ。なあ、ヒビキ！」

この先輩を知らない女子生徒は荒神高校中を探してもあなた一人ですよ、緋村琴音さん。

仕方なく川島耕太先輩について簡単な解説をしてあげた。

すると彼女はきょとん、とした顔をして川島先輩を指差した。

「耕太？ この顔で耕太？ 耕作の耕に太郎の太？」

「そ、そうだけど……た、太郎の太？」

「似合わねーつ！」

げらげらと爆笑する彼女は心の底から楽しんでいる。

いや、でも突つ込みどころはそこじゃないでしょ？

学校一のイケメン（自称と言いたいところだが本当なのが悔しい）だと、バスケ部のエースだつたとか、模試でもしばしば全国ランキングに名を連ねているとか……気を惹く話題には事欠かない先輩の、なぜわざわざ名前に突っ込む？！しかもその瞬間にあたしのすぐ隣でツンドラ気候と正反対、サバナ気候が爆発した。

「……人が気にしていることをおおおー！」

え、先輩、自分の名前気にしてたの？！

ど真ん中ストライクで先輩の傷を抉った緋村さん本人はすでに臨戦態勢。冷やかな目つきで今井くんの向かいに佇む先輩を見ている。

「君は？……誰だ？！」

川島先輩がからうじて絞り出した声に、緋村さんは今井くんを指差し、情の欠片もない声で言い放った。

「こいつの、幼馴染み」

「うおおおー、幼馴染みかああー！」

美術室の机に突つ伏して悶える川島先輩。まだ

「そんな最強の称号を所持しているとはああ……誤算だつたああ……誤算も何も先輩はいつも計算なんてしてないでしょー！」

馬鹿だから。

ぼそりと呟いた言葉は先輩に届かなかつた。

「いや、俺にもポテンシャルがあるぞ。学校一のイケメンだという

ポテンシャルがなーー！」

自分で言つてつや世話をことよ、とため息。

じつひじても誤解は早く解かねばならぬ。

「だが、幼馴染みではあるが付き合つてゐるわけではないんだな？」

「……」

緋村さんが一瞬口を噤む。

「こんな時なご、あたしは思わず頭の中の疑問をそのまま口に出してしまつた。

「……あの、前から気になつてたんだけど、

「ん？ 何だ？」

「緋村さんて今井くんとのじつは関係なの？」

「だから幼なじみ。もしくは保護者。あとは……弟みたいもんかな

「恋愛感情とかはないの？」

そう言つと、緋村さんは目を大きく開いた。

そして、すぐにはじけるような笑みを見せた。

太陽のようなその笑顔に思わず釘付けになつてしまつ。学校中の乙女たちを虜にしている理由が何となくわかつてしまつた、ような

……じゃなくて。

「ユーリ、お前のやつはいいのが好きだつー。」

「…」

「やつは意味？」

アレ？ しかも今の何気に告白テスカ？ これ、緋村さんを崇拜する後輩の女の子たちに聞かれたらいじめ問題発覚だよ？ 靴なくなつて筆箱隠されて体操服切り刻まれて机に落書きだよ？

「聞きたくい」とずばずば聞く感じ？ 躊躇ないって言つかなんかずれてるよなー。しかもシヨン本人の前で！」

そう言うあなたも本人の前なんですが。

当の本人、今井くんは完全に硬直してしまっている。泣きそうに大きな目を歪め、唇を引き結んでいる。この様子ではあたしたちの会話が耳に入つていいかも微妙だ。

そんな今井くんをちらりと見てから、緋村さんはあたしの耳に唇を近付けると、ぼそり、と呟いた。

「全くない、って言うとウソになるかもな。でも、今はこの関係がいい

「え？ それって……」

「ほんとうとか、シヨンがヒビキに懷いてるのもちよつと^やんだけんな

にやり、と冗談めかして言つたセリフに一瞬どきつとする。

それは……^{けんせい}牽制？

しかもこの距離。同性のあたしが惚れそうな微笑みが近づぎる。

「俺を無視するなー！」

先輩の叫び声ではつと我に帰つた。

まあ何にせよ、誤解は解かねばならないだろう。

「川島先輩、今井くんは」

「とにかく一人は付き合っているわけではないんだな？！」

「聞いてください」

「といふことはまだ俺が入り込む隙もあるひつといふもの…」

「だから」

「負けん！！」

「人の話聞け」

思わず出た本音だつたが、相変わらず先輩の耳には届いていないようだ。それどころか、今井くんは硬直しつぱなしだし、緋村さんは臨戦態勢。

この場にあたしの声が届く人間なんて存在していない。

「ヒ、ヒビキちゃん……ひいちゃんも川島先輩も、一人とも、どうしちゃったの……？」

気がつけば今井くんはあたしのカーティガノの袖をぎゅっと握つてふるふると震えていた。

あーもう何？ このかわいい生き物！

君を取り合つていてるんだよ、とも言えず、あたしは口を噤んだ。だけれども、とりあえずみんなのマスコット兼ペットであるこの少年を、そしてあたしの目の保養と精神の癒しの対象であるこの愛らしい生き物を、川島先輩に渡すわけにはいかない！

と、思つてはいるのだが、暑苦しい川島先輩と絶対零度の極寒冷気を放つ緋村さんとの間に割つて入る度胸はない。隣の今井くんと共にただオロオロするのみだ。

「お前、じゃあシユンの誕生日知つてるのか？」

「うつ！ そんな幼馴染的な質問は許さんつ！」

「知らねーんだろ。今日だぜつ！」

「何いいいい！誕生日おめでとひ、シユンちやんつー！」

ぐるり、と今井くんを見て極上の笑顔スマイルをキメる川島先輩。が、祝われた本人は困惑したように言つた。

「僕……誕生日、冬だよ？」

その瞬間、笑顔は脆くも崩れ去る。

「騙したなあつ！貴様つー！」

「敵を騙して何が悪い！」

「ふむ、それもそつか」

つてか、何気にあの二人、会話が成立してる？！
すごいよ、緋村さん！あの川島先輩とちやんとした会話ができるなんて！あたしなんて一年間ずっと通じないままだつたよ……
むしろ君が川島先輩と付き合つちやいなよ！

「だが許さんつー！」

「じゃあシユンの好きな食べ物は？」

「きっとショートケーキに違いない」

「……つー何で分かつた？！」

「愛だ！はははは！」

「じゃあ好きな花は？」

「うーむ。きっとアサガオだ。趣味は観察日記をつけることー！」

「あほかあつ！小学生じやあるまいし、ひまわりを育てて種を喰う」とでした！

その答え、すでに好きな花つてお題じやないよ？！てか今井くん……ひまわりの種、好きなのね。そう言えば以前、好きな画家は

「ゴッホだと言つていた氣がする。いや、特に関係ないとは思つが。

それよりもやばい、このままじゃ終わらない。

隣で震える今井くんのためにもあたしがどうにかしなくては。

この時あたしは、相当テンパつてたに違いない。そうじやなきや、ちゃんと川島先輩に今井くんが男で緋村さんが女だと伝えてしまつて、ハッピーハンドだつたのだ。

こんな風に、物語な話がスタートすることもなく。

「そんな問答やめてくださいよー もっと他に解決法があるでしょう? !」

あたしの必死の叫びは、なぜか一人に届いたようだ。
一人は言い争いを止めて一瞬こちらを向いた。

「ふむ、それはいい考えだね、風見響子さん」

「そうだな。そうする事にしよう」

「やはり、と二人が同時に笑つた。

「バスケットボールで」

「空手で」

「「勝負だーー!」」

一人の声がハモる。

どつちがどつちかは言つまでもないだらつ。

本当に、この二人は……!

付き合つてしまえ、お前たち。

「なんだよお前、元バスケ部なんだろ？ バスケ勝負は不公平だろ？ うが！」

「驚いたな！ 自分に自信がないからそういうことを言つたのだろう？」

あたしは、緋村さんがさつきの川島先輩紹介（＝元バスケ部だったこと）をちゃんと聞いていたことの方が驚きです。

「何おうつ！ ヴァイオレンス・バスケにじょうぜ！ それなら公平だろ！」

「いいだらう！」

何がいいの？！

ヴァイオレンス・バスケって何？！ それスポーツ？！ 一対一で出来るの？！ 何でそこ、話が通じてるの？！ そんなに有名なの？！

つーか名前が超絶物騒なんですけど？！

「あと二人、仲間集めて来い！ 明日中にメンバー揃えて、明後日の朝、7時に体育館で待つッ！」

あ、30on3ルールなのね。
じゃないってば！

「望むところだ。俺は負けん！」

どうしてこんなことに……現況になった可愛い少年はあたしの横で震えますよ？ ていうかあなたたち、もう今井くんのことどうでもいいでしょ？ 勝負したいだけでしょう？！

それでも、今更止めるに止められなくなつたあたしは、今井くん

と一人で硬直するしかなかつた。

「じゃあシヨン、そつまつことだから今日は一人で帰つてくれ！
明日もなつ！」

「ええええ？！ ひいちゃん？！」

そつまつて片手をあげ、颯爽と去つていいく緋村さん。

「明後日の朝は君も来てくれよ、風見響子さん！ 審判がいないと試合にならないからね！」

「あたしに審判させる気ですか？！」

バスケのバの字も知らないのに、いきなりイレギュラールールのヴァイオレンス・バスケ審判なんて無理に決まつて！ ていうかそれ何？！ 誰か教えて！

そしてお願い、誰か止めて！
あたしは心の中で叫んでいた。

違うんだ。あの場所にいた中で、唯一これを止められる可能性があつたとしたらあたし一人だつたんだ。誰かに頼んだつて無理その相手がたとえ神様としても。

だつてもし、今井くんと川島先輩が出会つたことも、そこへ緋村さんが乱入してしまつたことも神様が仕組んでたんだとしたら、神様も少女マンガみたいな物語ストーリーを望んでたに違いない。

その神様がこの無茶苦茶なプロローグを止めさせてくれるはずもなく。

そう、もし神様に願うとしたらこうだ。

「あたしを巻き込まないで！」

しかもこれがただのプロローグでしかなくて、あたしみたいな善良な市民を巻き込んだ物語がスタートするなんて、思つてもみなかつたから。

自分を守るには自分で頑張るしかない。

そんな簡単なことがなぜ分からなかつたんだろう！ 中学で学級委員を3年連続で押し付けられた時も、友達が誕生日にくれて大事にしていた傘をパクられた時も、可愛がつていた飼い犬のリリが死ぬ時も、世界はいつだつて助けの手を差し延べてくれなかつたつていうのに！

そして二日後、朝6時50分。

あたしは重い頭を無理やり叩き起こして体育館に向かつた。もう、気が重くて仕方がない。

この時間なのに廊下に生徒が多いのは、きっと氣のせいじゃないだろう。

大々的にメンバー募集をしたのが学校一のイケメンと名高い川島耕太先輩と、女子生徒にカリスマ的の人気を誇る緋村琴音さんなのだ。注目を集めないわけがない。

いかに荒神高校が進学校と言えど所詮は高校生。お祭り大好き、イベント大好きであることに変わりはない。

がらり、と重い扉を開けると、早朝の体育館は、一人の決闘（？）を心待ちにする生徒で溢れかえつっていた。

ふと、一階席の最前列に陣取る上級生の会話が耳に入ってきた。

「んで、何で川島は2年の緋村を敵に回したんだ？」

「さあ？ 本人に聞いたけど、あいつもいまいち覚えてなかつたみたいだぞ」

「まあ、仕方ないか。川島だからな

「そうだな、川島だからな」

その会話で一気に脱力する。

やつぱり……もう勝負したいだけなんだよね、一人とも。もう今井くんのことなんてどうでもいいんだよね。合言葉は「川島だからな」 それだけで、先輩がどんな扱いを受けているか知れるとうもの。

大きなため息をつきながら、バスケ部の有志によつてすでに用意されたコートに向かつていると。

「ヒジキちゃん！」

後ろから愛らしい声が追いかけてきた。

今回の騒動で一番不幸な、でも全くその不幸を感じていかない少年が駆けてきた。

「おはようーーすーじねえ、ひいちゃんも川島先輩も人気者だね！ でも僕、ひいちゃんに勝つて欲しいなあ。川島先輩も嫌いじゃないけど、ひいちゃんの方がもっと好きだもん」

「……おはよー」

思わず顔が引きつったのは、今井くんがさらりと緋村さんへの好意を示したからではなく、彼のパーカーのフードに溢れんばかりのお菓子が詰め込まれていたからだ。

キャンディー、ガムに、チョコレート。それどころか食べかけの
お煎餅の袋まで入っている。

「今井くん、後ろ……帽子の中、すここ事になつてるよ?」
「えつ?」

今井くんが慌てて後ろに手をやると、その反動でお菓子がばらばらと落ちた。

「わつ、うわつー。」

慌てて動く度にお菓子が体育館の床に散らばる。
もう一度ため息をついてから、一緒に拾い始めた。

「あのねー、たまにねー、フードにお菓子が入つてるんだあ。でも、
こんなに多いのは初めてだよー。」

実は、荒神高校の生徒の間で、今井くんのフードにお菓子を入れ
るというゲームが流行つている。

今井くんがまったく気づかず、それどころか『天使の分け前』と
言つて喜んでいるため、その流行は全く収束を見せないのだが。
今日はまた一段とひどい……いや、今井くんが喜んでいるからむ
しろ豊作?

一生懸命拾つていると、上から大きな声が降つてきた。

「ああ、風見響子さん! 試合を始めるよー。」

あああ、そんな大きな声で、こんなたくさんのギャラリーの前で
名前呼ばないでよ、先輩!

あたしはあなたと違つて穏やかな高校生活を望んでいるんですう……。
などとこう心の声は届かない。だつて先輩には声に出したつて届かない。

なぜか空手着に身を包んだ緋村さんが完全に戦闘態勢で川島先輩に指をつきつける。手首に巻いた真っ赤なリストバンドがよく似合つている。

それだけでギヤラリーから歓声が沸いた。

「手加減しねーぞ」

その言葉は、なぜか歓声に負けず、凛とこの空間に響いた。

緋村さんのチームはクラスメイトの葛葉くん（空手部員）と、桂くん（野球部のエースピッチャー）。葛葉くんは先日の新人戦で地区代表になつたつて噂だし、桂くんもスポーツ万能の高校球児だ。どうやら緋村さんが強引に誘つたようで、葛葉くんは眠い目をこすつている。面倒くさがりな彼のことだ、そのうち『帰ろつぜー』なんて言い出すのは目に見えている。

しかも、桂くんの方だつて夏の大会が近いんだから野球部の朝練習があるはずだが。

「望むところだ」

対する先輩も不敵な笑みで応える。

先輩のチームは一人とも見た事はない　いや、左隣で制服のままため息をついているのはついこの間までバスケ部のキャプテンをやつていた大井先輩だ。川島先輩ともそれなりにうまくやつていた名キャプテン。温厚な性格で知られているのだが……無理やり引きずられてきたんだろう、可哀想に。

もう一人は後輩だろうか。ちゃんとバスケットボールのユニフォームを着ているあたり、生真面目で先輩の頼みを断れなかつたんだろうこと は一目で分かる。

多くの人の犠牲の上にこの試合は成り立っているんだなあ……。

すると、あたしの元におそらく一年生と思われる坊主頭のバスケ部員が駆けてきて、ハイツスルを渡した。

何？ これ、吹けつて？

はやくはやく、と目でせかす一年坊主に押されて、大きく息を吸い込んだ。

۱۰۰

開始の笛が鳴つた。

じつして、もう理由も目的も分からなくなってしまった勝負が、スタートしたわけである。

ヴァイオレンス・バスケたるもののがルールはいまいち分からないが、最初はジャンプボールと見せかけて……なんと、真ん中で緋村さんと先輩がじゃんけんを始めた。

えつ？！ なんか名前の殺伐さと裏腹に微笑ましいんですけど？！

と、思ったのも束の間。
じやんけんの勝負がついた瞬間、緋村さんが先輩に向かって上段
蹴りを繰り出した。

すれすれでかわした川島先輩は、手にしたボールを背後にいた制服の大井先輩に向かつて投げる。

と思った時には、すでに大井先輩の背後に回っていた葛葉くんが

鋭い突きを繰り出していた。

「へつ？」

思わず間抜けな声が出た。

何これ？！ いつたい何が始まったの？！

会場のテンションは最高潮！
ヤジと歓声が飛び交っている。

「避けんな、コータあ！」

「はつはつは、避けるぞつ！ 当たると痛いからな！」

その間も緋村さんの攻撃は止まない 上段蹴りから後ろ回し蹴
り、さらに連続足刀へのコンビネーション。
流石の川島先輩も防戦一方だ。

と、先ほどあたしに笛を渡したバスケ部の一年坊主がちょちょい、
とその様子を指差す。

どうやら笛を吹け、と言いたげだ。

仕方がないのでとりあえず笛を鳴らす。

「ピイイ〜〜つ」

「赤、ヴァイオレンス。オーバーアタック！」

はつ？！ もしや、今のは何かの反則？
慌てて隣の一年坊主に聞く。

「何、今の、反則なの？」

「ボールを持つていない人に攻撃を加えるのはオーバーアタックと

「う、ヴァイオレンスです」

ヴァイオレンス、って『暴力』……そのままじゃねえかああ！
はつ、いかんいかん。思わず笛を床にたたきつけるところだった。

「ほら、すぐ！ 笛！」

「ピィ～～」

「赤、ヴァイオレイション。トラベリングー！」

ん？ ヴァイオレイション？ は、『違反』……しつちもそのま
まかよつ！
紛らわしいわああ！

第一、全員動きが速いしボールがあちこちぼんぼん飛び回つてい
るせいで、スポーツなんて体育以外やつたことのないあたしには、
全く試合についていけない。

と、思った瞬間、葛葉くんの正拳突きがユニフォームを着たバス
ケ部2年の腹にヒットした。

手に持っていたボールはてんてんと床を転がる。
あつ、これさすがに殴つたんだから反則じゃない？
そう思つて勝手に笛を吹く。

「ピィ～～」

ところが、一年坊主の口から出たのはむしろ葛葉くんのポイント
を告げるものだつた。

「赤、正拳中段突き、技ありつ！ 赤2ポイントー！」

技ありいつ？！ 何だそれええ？！

すでにバスケじゃないよね。今の、バスケじゃないよね？！
攻撃がジャストヒットしたバスケ部員は床に崩れている。

その間に葛葉くんはボールを拾い上げて緋村さんにバスを回した。

「ちょ、えつ？ 今の、いいの？！」

「当たり前じゃないですか。技の入り、タイミング、引き、気合い
……完璧でしたよ！」

「聞きたいのはそこじゃねえええ！」

「一から一完全に把握してんなら、お前が笛を吹け！！

もう帰りたい。

目の前では制服の大井先輩と、ボールを持った桂くん（高校球児）
の間で目にもとまらぬ攻防が繰り広げられている。

桂くんがボールを庇つて防戦している間に、川島先輩が後ろから
ボールを奪う。

「ナイス・ステイール！ 川島つ！」

「川島先輩かっこいいー！」

観客から声援が飛び、ボールを持った先輩はそのまま余裕でショ
ートを決めた。

調子に乗った先輩は、ギャラリーの声援に応えてそのままウイー
ング・ラン。

腐つても（腐つてないけど）川島先輩は元エース、それに元キャ
プテン大井先輩、現役バスケ部員の3人が相手なのだから、純粋な
バスケでは、緋村さんチームに勝ち目はないだろう。

さあ、どうする……って、なに乗せられてんの、あたし？！

いつしか鳴り物まで登場して、発熱する会場。
ああ、もうみんな好きにして……

「ピィーー」

「上段回し蹴り、技ありっ！」

緋村さんの蹴りが、パスを受けた瞬間の大井先輩の頭に炸裂した。

「きやああああ！ 大井先輩 つ！」

「緋村先輩、がんばつて～！」

女子生徒から黄色い声援が飛ぶ。そして笛を吹くタイミングをつかんできたあたし。

しかし、緋村さんの蹴りを側頭部にものに受けながらも、大井先輩は立ち上がった。

そのままシャツの袖をまくりあげ、きつちりと止めてあつたボタンを2つほど外す。そして、軽く息を吐いてから体の調子を確かめるようにトントン、と軽くその場でステップした。そして、ずいぶん身長差のある緋村さんを見下ろした。

緋村さんだつて170cm以上はあるはずなのに……さすが大井先輩。2m近くあるんじゃないだろうか。そしてその頭部に蹴りを入れた緋村さんの身体能力は常軌を逸している。

つーか、大井先輩まで本気モード？！

あの川島先輩ともそれなりにつまくやつていたくらいに温厚な大井先輩が声を荒げた。

「板割ることしか能がない、空手部なんかに負けるかっ！」

「板なんか割つたことねーよ！ いや、割れると思うけどな？」

「ちつとは空手について勉強しやがれっ」

相手は先輩だというのに、緋村さんが口汚く応酬する。

ていうかあれ？ 空手つて板割るんじゃないの？

なんて素人大爆発の疑問には答えてくれるはずもなく、緋村さんと葛葉くんが順調にポイントを稼ぎ、一度も「ホールを揺らすことなく先輩チームと競^せっている。

ある意味このヴァイオレンス・バスケというゲームは彼らにぴったりの勝負だったのかもしれない。

ところが、この試合で唯一得点に絡んでいない人物がいる。

「がんばれっ！ 桂くん！」

ずっと隣で拳を握つて応援していた今井くんの愛らしい声援が飛んだ。

そう、野球部員の桂くんは戦闘^{バトル}でも籠球^{バスケ}でもまったく得点に絡めないでいたのだ。まあ、それは……仕方ないっちゃ仕方ないのだが。とても女性と思えない身体能力を発揮している緋村さんをはじめとして、完璧なタイミングで攻撃を仕掛ける葛葉くん、それにバスケ部員3人の中に入ってしまっては、このルールで高校球児の活躍の場などない。

「ひいっ。赤、ヴァイオレイション。インターフェア！」

鋭い一年坊主の声が飛ぶ……つて、あたし笛吹いてないよ？！

いま、自分でぴーって言ったでしょ、そこの一年坊主！

勝手に審判し始めた一年坊主の首にこつそり笛をかけておくと、彼は気づかずにそのまま笛を持ってコートを駆け回り始めた。

よし、これであたしがいなくなつても大丈夫……

「ヒジキちゃん、桂くん大丈夫かな……？」

「うそり逃げようと思ったのに！」

逃げようとしたあたしの服の裾を、今井くんがしっかりと握っている。

そんなうらうらした瞳で見つめないで！

「桂くんだけまだ一点も……しかも、焦つてるみたい」

確かに彼は先ほどから反則を連発している。

きっと自分だけ役に立つていないと焦りからだ。

「赤、ヴァイオレンス。オーバーアタック！」

とうとう桂くんはボールを持たない川島先輩に攻撃を仕掛け、反則を取られてしまった。

「何だよ……あいつだけ足手まといじやん」

「ゲームに水差すなっての」

観客の心ない陰口。

桂くんがぐつと歯をかみしめた時だった。

観客席から凄まじく大きな声が降ってきた。

「桂 つ！」

会場にいた全員の視線が集中する。

そこには、顔を泥まみれにした野球少年の姿が あたしの記憶が確かに、あれは野球部の時期キャプテンと噂され、桂くんの女

房役に当たるキャッチャーの相馬くんだ。

朝練習を途中で抜けてきたのか、大きく肩を揺らして息を整えて
いる。

「なつ、相馬？！」

驚いた顔の桂くんに、相馬くんが何かを投げる。

遠くてよく見えないが、どうやらあれば……野球のボール？

「使え、桂つ！ 野球部の底力、見せてやれ！…」

「相馬……」

ぱし、とボールを受け取った桂くんは、そのボールを大事そうに胸に抱え、そして唇を引き結んだ。

「つおつしゃあああ！ 野球部なめんなああ！」

彼は気合い一閃、大きく振りかぶった。

か、桂くんの背後にマウンドが……甲子園が見えるつ？！

「甲子園に……」

Hースピッチャーの投球。

「つれてつてええええ！」

田測150km/h！

まっすぐに飛んだ剛速球は、ユニークなフォームを着たバスケ部2年の腹に鈍い音を立てて突き刺さった。

そのまま後ろ向きに吹つ飛び姿を、会場の全員が声も出せずに見

守っていた。

静まり返る体育館。

はつとしたあたしはとりあえず笛を吹いた。

「ピ———ッ」

あれつ？！

ちょっと待て、なぜに笛があたしの手元に戻っているんだ？！
と、思つたら一いつの間にか隣に戻つてきつた一年坊主が叫んだ。

「赤、武器使用により退場！」

つて、えええええ？！

ポイントじゃないの？！

「武器使用つて一発退場なの？！」

しまつた、突つ込みたかったのはそこじゃないのに！

「当たり前です。そうしないと、みんな火縄銃や火縄銃や火縄銃なんかを使いだして收拾つかなくなります」

「……それが野球のボールでもダメなの？ ていうか火縄銃？ これ、どこの国のスポーツ？ ていうか本当にこれスポーツ？」
「例外は認めません」

「ああ、そんな……ようやく桂くんが活躍の場を見出したつていうのに！」

「あつ、ちょっと待つて、あたし感情移入しだしてる？！ このハチヤメチヤな状況を呑みこみつつあるの？ ああ、嫌だつ！ それ

だけは嫌だ！

「桂くん……かつこよかつたね」

ぽつり、と隣の今井くんが呟いて、にこりと笑つた。

ああ、その笑顔だけでもきっと桂くんは救われると想つよ。

会場内を割れんばかりの拍手が渦巻いている。

桂くんの勇姿を湛えて。

その桂くんは、照れくさそうに観客席の相馬くんに向かつて手を振ると、体育館を後にした。

その後、エースピッチャーの直球を食らったバスケ部員は戦闘不能で退場。

川島先輩・大井先輩の3年バスケ部チームと緋村さん・葛葉くんの2年空手部チームで勝敗を喫することとなつた。

「時間ねーぞ、緋村つ」

最初は眠そうな顔をしてたくせに、いまや汗がきらきらと輝いて完全に青春真っ只中！の真剣な表情をした葛葉くんが緋村さんに檄を飛ばす。

緋村さんはそれを聞いてきゅっと眉を寄せる。

「分かつてゐるわ」

試合は先輩チームが一歩リード。

とはいって、すぐにでもひっくりかえせる点差だ。

「一か八か、ゴール狙うぞ、葛葉！」

「おうよつー！」

阿吽の呼吸で同時にダッシュした緋村さんと葛葉くんは、それぞれ大井先輩と川島先輩に飛びかかっていった。

いつの間にかラブコメでなく青春スポーツマンガへと変貌を遂げていることに、あたしは突っ込みを入れる暇もなく。

田の前の試合は佳境を迎えていた。

「はつはつは！ バスケ部に純粹なバスケで敵うと思つなよ、空手部！」

川島先輩があつさりとドリブルで葛葉くんを抜いていく。

「しまつ……！」

3対3だったといつのに（今は既に2対2だけ）、コートはフルコート。

30分近く走り続けた葛葉くんの足は限界に来ていたようだ。

足をもつれさせて盛大に転んだ葛葉くんを振り向きもせず、川島先輩はゴールへと向かう。

先輩の手から放たれたボールは、音もなくリングを通り抜けた。お手本のようなショートだ。

「……！」

残り時間が少ないこの状況で点差が開くのは絶望的だ。

緋村さんも荒い息を整えながら、床に転んだまま起き上がれないでいる葛葉くんの元へと向かった。

「大丈夫か？」

「……すまん、もう足が……」

じつやら葛葉くんも限界のようだ。立ち上がる寸前からまた倒れない。

「ありがとな、葛葉。お前はここで待つてろ」

「どうする気だ？ 緋村」

緋村さんが葛葉くんの耳元で何かを囁くと、葛葉くんの表情がぱつと輝いた。

「まじで？！ それ面白いぜ？！ ってか、俺キルアじゃん！！ やつたー！」

「へ？ キルア？ あれですか？ 休載が売りの某連載漫画の？ あー、そろそろ続きを読みたいです。つてそんなことはどうでもよくて。

「よし、任せろ、緋村あー！」

「おう、頼むぜー！」

「コート外からのスローライン。

思いきり投げたボールは、コートの中央あたりに座り込んだ葛葉くんに届いた。

ボールを受け取り、高く掲げた葛葉くん。そして、すぐに中央まで走り、葛葉くんの前で腰を落とし構えた緋村さん。なんだか引いた拳に気を集中させているように見える。

もしや、アレですか？！ ドッジボールの試合で某漫画の主人公と親友の暗殺者くんがやつてたアレですか？！

「そんな思いつきの技が通用するとでも思つのか！」「やつてみなきや！」

緋村さんがカツと目を開く。

ボールを頭上に掲げそれを待ち受ける葛葉くん。でもさ、せつかくボール持ってるんだからバスケらしく普通に投げよう……なんてあたしの声は誰にも届かない。

「わかんねーだろつ！」

繰り出された正拳突きが正確にボールの真芯を捕えた。

凄まじい勢いで飛んだボールはそのままバックボードに激突し、そして、その反動で大きな音を立ててゴールリングを通り抜けた。

「ピイイーーーっ！」

文句無しの得点。

そして、両チームの点差は1点だ。

残り時間はとっくに1分を切つていて。

しかし、何とここへきて、先輩チームに焦りが出てしまつた。

何と大井先輩が痛恨のバスミス！

ボールの所有は緋村さんチームへ。

もちろん彼女はすぐにそのボールを葛葉くんへ。
これが入れば逆転だ。

「次はオリジナルな！」

そう言って緋村さんは助走をつけて飛び上がった。
まさか今度はボールを蹴る気？！

「させるかあつ！」

といろがなんと、大井先輩が葛葉くんにタックルをかました！
笛を吹こうかと構えたが、そう言えばボールを持つてゐる人への攻
撃は反則じやないんだつた。ああ、ここへきてアグレッシブだなあ、
大井先輩。

ボールを持つ葛葉くんの体が衝撃で倒れる。
何とか体勢を立て直したもの、予想外の攻撃に、ボールの位置
がずれている。

すでに蹴る体勢に入つていた緋村さんは、葛葉くんだけは当たら
ないようと無理やり蹴りの軌道を修正した。

体勢を崩しながらもなんとかボールに蹴りのインパクトを持つて
きたが

「しまつた！」

ボールはと言つと、狙いよりも低く飛んだがためにゴールとのラ
イン上で待ち構える川島先輩のもとへまつすぐ飛んだ。

「川島、避けろ！」

大井先輩の声もむなしく。

制御を失つたボールは、先輩の顔面にめり込んでしまつた！

「ぱちいん！」

あつちやあ、綺麗な顔が台無し……じゃなくて、すごい音したけど大丈夫？

顔面でボールを受け止めた川島先輩は衝撃を止めきれず、そのまま後ろに大きく仰け反つた。

観客席から悲鳴が上がる。

緋村さんは大きく目を見開いた。

「つーーー！」

残り時間は数秒。

もう勝負は決まつたものと、そこにいた全員が思つた。

ところが。

「がんばれ、ひいちゃん！」

今井くんの声が響き渡つた。

彼はあきらめていなかつた。彼だけは、時間いっぱいでもまだ希望を捨てていなかつた。

ひいちゃんに勝つて欲しいな 試合前にそう言つた彼の必死の叫びは、きっと彼女の心に届くはずだ。

「シユン……」

会場の割れんばかりの声援と悲鳴を越えて、緋村さんの唇がそつ動いたように見えた。

その瞬間、緋村さんの瞳に闘志の炎が戻つてくる。

「まだ終わつてねえ！」

川島先輩の顔の上に乗つてゐる状態のボールを見据え、大地を蹴つた。

「ひいちゃんつ！」

緋村さんは、最後に今井くんを見てにこりと微笑んだ。

一瞬なのに瞼の裏に焼きつくくらい、魅力的な微笑みだった。

「くじえつ、必殺……」

まるで羽根でも生えているかのように、緋村さんは軽く宙を舞つた。

そのまま体を捻つて先輩の顔の上のボールに狙いを定める。

「ウイリアム・テルつ！」

息子の頭の上の林檎だけを射抜いたかの有名なウイリアム・テルのように、先輩には全く触れずにボールだけを正確に蹴り飛ばした緋村さんは、その反動で背中から床に落下した。

ボールは真つ直ぐにゴールへ飛んだ。

ががん！

凄まじい音がしてボールはバックボードに激突する。

そのままリングとの間で跳ねまわる。

会場中がそのボールの行方を目で追っていた。

少しずつ、少しずつボールの動きは収まつていく。
そして。

ボーリングがリングを通り抜けたその瞬間。
あたしは、思いつきり、笛を吹いた。

その音は体育館中に響いて、まるで一瞬だけ時が止まつたかのように静けさがその場を支配した。

響くのはボールが床を転がる音だけ……

「よつしゃああああー。」

緋村さんの雄叫びが上がる。

「わーい！ ひいちせん、おめでとう。」

嬉しそうにひょんひょんと飛び跳ねる今井くんは、きっと勝利の

すべてが終わった……と思つたあたしたちの耳に、現実の鐘の音

が響き渡る。

そう、^{チャイム}予鈴だ。

だつて今日は

「しまつああああ！　テストがあああ！」

その川島先輩の雄叫びで、体育館内は騒然となつた。慌てて教室へ向かう者、焦りすぎて一階席から落下する生徒、そして動転したのかおもむろにモップ掛けを始める生真面目なバスケット部員。

それでもなぜか全員がテストに間に合ひつつ席に着いたのは、奇跡としか言いようがないだろう。

テストの結果がどうだったかは別として。

「はああ～、疲れた～」

どうにか3日間にわたるテストを終え、あたしの後ろの席でぐつたりと机に突つ伏したのは、あの対決以来さらにファンを増加させている緋村さん。

今も教室の外では下級生の女の子がちらちらとこすらを窺つてたりする。

そして、あたしに向けられる視線はちくちくと痛い……もしや、上履きがなくなるのは時間の問題か？

「……お疲れさま

苦笑いで返すと、緋村さんもむちゅっと顔を歪めた。

「なあ、ヒビキ。結局あいつ、なんだつたんだ？」

あいつ=川島先輩。
▲オーラ

「うーん、それは……」

「」もつた瞬間、ズズズズ、と大きな足音がして、教室の扉がばたん！ と開いた。

嫌な予感。

恐る恐る振り向くと、そこにはあたしのスケッチブックの大半を占める顔があつた。

鼻の頭に絆創膏をはつているのは、3日前の試合で顔面にボールを受けたせいだろう。まあ、そんなものきっと川島先輩にかかれば『俺の美貌を損ねる理由になりはしない』のだろうが。

その先輩は颯爽と教室に入つてくると、机にぐつたりと突つ伏している緋村さんにびしりと指を突き付けた。

「今日は負けたが次は負けんぞー、緋村ああー！」

あれ、先輩はその名前をどこで覚えたんだろ？

そして、つかつかと今井くんに歩み寄り、どこから取り出したのか小さな赤の髪留めをぱちん、と彼の柔らかそうな髪に留めた。

「そしてシュンちゃんに誕生日プレゼントだ」

「あ、ありがとう先輩！」

うわあ、可愛い笑顔向けちゃつてるよ。っていうかそのヘアピン

可愛いんだけど。もうなんか女の子にしか見えないんだけど。つていうか、クラスの誰か突つ込めよ。

と思つて周囲を見渡したが、誰も関わりたくないんだろう。もしくは面白がつてわざと教えないでいるのか……みな遠くから見守るだけだ。

「でもね先輩、僕の誕生日は……」

その瞬間、絶対零度、ツンドラ気候の空気を纏つた緋村さんがその間に飛び込んだ。

「シユンは渡さんつ！ お前、勝負に負けたくせに往生際がわりーぞ！」

「誰が一回勝負だと言つた！ 次は駅伝で勝負だ！」

「なにいーつ？！ ただの駅伝じゃ面白くないから、フリッシュユ計算駅伝にしようぜ！」

「この俺に算数で挑もうとは笑止千万！ 返り討ちにしてくれるわあー！」

「お前らは小学生か」

ぼそりと呟いたが、やっぱり誰の耳にも届かない。

あたしの声を聞いてくれる人は、この先現れてくれるんだろうか。はあ、と大きなため息をつくと、つんつん、と肘のあたりが引っ張られた。

振り向けば、そこには泣きそうな顔をした今井くん。

「……ね、ひいちゃんと川島先輩、なんでもまた喧嘩するの？」

それはね、君を取り合つてゐるんだよ……相変わらず口には出せ

ず、心中で飲み込んでしまった。

「お前にシヨンの何が分かる?...」

「無論、何でも!」

「じゃあシヨンの親父の名前は?」

「健太郎つ!」

「はずれ!」

「では健二だな?...」

「違う!」

「健三郎つ!」

「それも違う

「健四郎!」

「どんだけ『健』好きなんだつ。正解は『耕太』でしたつ! 耕作の耕に、太郎の太つ」

その瞬間、先輩の額に青筋が浮かぶ。

「その名を呼ぶなああ!」

ホント仲いいよね、この一人。だからお前たちが付き合えばいい（シンドリーちゃん風）。

またもめちゃくちゃな言い争いを始めてしまった二人を見ながら、今井くんに尋ねてみる。

「ちなみに今井くんのお父さん、本当は何て言つの?...」

「健太だよ」

「へへ、『トミス?...』

「でもさ、一人とも、またあんな風に戦つたりするのかなあ

終わる事のない言い争いを見てため息をついた今井くんの為に、「Jの争いをやめる」という選択肢はある一人にないのだろうか。が、今井くんはにJりと笑って、言った。

「うん、でもひーちゃんは負けないよね。だつてすつゞく強いもん！」

そんな今井くんの笑顔は、あの最後の瞬間に見た緋村さんの笑顔とダブつて見えた。

お互いを信じる事が出来る、それこそが幼馴染のポテンシャルなんだろう。

可愛い今井くんと、カツ「いい緋村さん。

きつと二人はこれでバランスがとれているに違いない。
そう思つたら、知らず、笑みがこぼれていた。

次のモチーフは、あの時の彼女の笑顔にしよう。
うん、きつとそれがいい。

そして、今井くんのスケッチの隣に飾るとしよう。

窓の外には、あたしたちの物語を飾るのに相応しい、最高の青空
が広がっていた。
ストーリー

キャラクター設定

和藤渚さまからいただいたキャラクター原案

1 今井俊太（いまいしゅんた）男 17歳の高校2年生ながら身長147cmと小柄な上に童顔なのでよく女の子に間違われる。そのことにコンプレックスは感じておらず・・・といふか気づいていない天然少年。

性格はとても明るくて少し甘えん坊。

2 緋村琴音（ひむらことね）女 俊太の幼なじみでクラスメート。身長170cmと高くとても男勝りな性格で顔立ちもボーリッシュなので俊太と逆に男の子によく間違われる。アネゴ肌で同性からも慕われる。

とても活発で気さくな性格。

3 川島耕太（かわしまこうた）学校1のイケメンで1コ上の先輩。

全く人の話を聞かず、思い込みが激しい。何も知らずに俊太に一目ぼれ。

とてもナルシスト。

* * * * *

(以下、蛇足的なあとがきです)

もへ、とりあえず最初に。

キャラクター原案をくださった和藤渚さま、すみません…

こんなつもりじゃなかつたんです…。（何）

原案が送られてきて、とりあえず、ああ、ハフハメだ。
と思つて。

やうにれば「メモ」書いたことねーなーと思つて。

何のプロジェクトも立てず（おこ）『氣の向くままに書いた結果』いつな
つてしまふました！

イメージは、少年漫画の読み物です。

友情、努力、勝利、みたいな？（いつたいビ）にその要素があつたんだ）

ただ、書いている間、純粋に楽しかったです。

それだけでもかなり嬉しい収穫。

いやはや、本当に今回は自分の底の浅さだけが露呈されてしましました。

もう少し「小説を書く」という動作になれなくちゃいけませんね。

実際、与えていただいたキャラクターの第一印象を優先して書きました。

そうでないと、おそらく動かすにあたって支障が生じてしまうと思いました。

キャラクターが先にある以上、イメージと違う動きをさせてもどうしても不自然になってしまふから、多少ストーリーを犠牲にしても人物を動かすことにしてよし！ という考え方からです。

ですが、やはりそこはプロダクトなし、考えなしの悪いところ。

文章として完結はしましたが、とくに伝えたいこともなく、特徴もなく、「結局何を書きたかったの？」という結果になってしまい

ました。

とくに、今井俊太が男で、緋村琴音が女である、というポイントを全く有効活用できなかつたのが一番の心残りです。

何より自分、コメディセンスねーなつていうのが本当に正直な感想です。

企画してくださつた針井龍郎さま、原案をくださつた和藤渚さま、そしてこの企画に参加された作者をまと読んでくださつたみなさまに、心からの感謝を。

* * * * *

以下、自分がこの作品を書く前に設定した全てです。

少なつ！

ただのおまけ（といふか文字数稼ぎ・汗）です。

今井 俊太 (いまい しゅんた) 男 17歳 高校2年 14
7cm

小柄・童顔でよく女に間違われる。そのことにコンプレックスを感じておらず……というか気づいていない天然少年。

明るくて少し甘えんぼ。

吹奏学部クラリネット奏者、マスコット係。ただし絵を描くのも好き 何気に響子と仲良し。ふとした拍子で川島に会いつ。パー カー好き。いつもフード付き。校内を歩いて、気がつけばフードにお菓子が入っている（天使の分け前／エンジェルズ・シェア）。

言葉は基本ひらがな。ぼくっ娘と間違われる。

ぱっちりとした目（淡茶に近い）、色素薄め、丸顔、ほっぺふにふに。

（ぼく・きみ・あのこ、あのひと）

緋村 琴音（ひむら ことね）女 17歳 高校2年 170
cm

俊太のクラスメート・幼馴染。ボーカル・シユで男に間違われる。男勝りな性格。姉御肌で同性からも慕われる。とても活発で気さ

く。

空手部唯一の女子部員。マネージャー 選手という経歴。もともと個人で道場に通っていた。

顔はジャニーズ系、逆ナンも多い。

少し癖のある黒髪、漆黒の瞳。運動神経抜群のため細身でも骨格

がしつかりしている。

(オレ・お前・あいつ)

川島 耕太 (かわしま こうた) 男 高校3年 185cm

俊太に一目ぼれする。イケメン。

人の話を聞かない。思い込みが激しい。ナルシスト。

今はバスケ部を引退して受験勉強の合間に縫つて美術部のモデル専任。絵心は全くない。ナルシストで馬鹿で人の話を聞かないけどなんだかんだやる時はやるのでみんなに愛されている。

合言葉は「川島だからな」。

いわゆるイケメン。信条でピアスはしないが、装飾品が好き。絵は全く描けないがセンスはいい。

(俺・君・あれ)

【語り部】

風見 韶子 (かざみ きょうこ) 女 高校2年 151cm

いたつて普通。美術部。なぜか事あることに3人と絡んでしまう。弟がひとりいるため、時に少年漫画に詳しい。親父好き。好きなタイプは渡辺謙。

二重で横に長めの目、鼻は低いが全体的なバランスがとれている。化粧で美人に化ける系。

(わたし・あなた・あの子)

それでは、お付き合いでいただきありがとうございました！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9943d/>

ラブコメは他所でやって！

2010年10月11日12時20分発行